

研究ノート

ヴェトナムにおける土地概念 公田制をめぐる

田 淵 幸 親

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

要 旨

ヴェトナムは1986年以来、ドイモイ政策の進展により経済発展が著しい。日本からのヴェトナム旅行者も増大の一途をたどっている。しかし、観光旅行を楽しむ人びとにとって観光旅行地以外のヴェトナムは無縁であろう。ましてヴェトナム村落を見ようという奇特な人はいまい。そうしたときだからこそ腰をすえてじっくりとヴェトナムのことを考えてみることも必要となる。本稿では、社 xa とよばれるヴェトナム村落に焦点をあて、社内での慣行であった公田制 cong dien についてまとめた。

キーワード

ヴェトナム、公田制、社、黎朝 Nha Le、村落共有田

目 次

はじめに

ヴェトナムの公田制

公田制における割替制

ヴェトナムの村落

おわりに

ヴェトナム語で用いられている表音記号はすべて省略した。

はじめに

ヴェトナムにおける北部 Bac Bo と南部 Nam Bo の土地利用形態には大きな違いがある。ヴェトナム北部はジャワ島と同様に人口周密なところとして東南アジア地域においては戦前より知られていた。ジャワ島における人口増加は、きわめて大きな特異性を有する。ジャワ島の人口は、表1でみられるように、半世紀ごとに倍増している。また、1815年から1845年にいたる30年間に他の年代の人口増加率と比べて驚異的な増加率を示している。ジャワ島では1世紀のあいだに10倍の人口増加を記録したのである。この要因については、「ジャワ及びマツラの人口が急速に増加したのは和蘭に依る統治の結果である。即ち和蘭は戦争を終息せしめ、

近代的な西洋衛生術（例えば天然痘に対する種痘の如き）を応用し、且又、経済力を開発してこの島をして砂糖、椰子実、規那、コーヒー、茶等の農産品の重要な供給地たらしめたのである。和蘭人は農園企業を創設したのみならず、土民を強制（十九世紀の後半には援助と指導に転換したが）して農業生産を盛んに拡張して世界経済に投入せしめた」¹⁾ からだという分析もある。つまり、ジャワにおける農産品の生産が世界経済とリンクできたために農業労働人口を必要とし、その需要がジャワへの人口集中を喚起したとするのである。

ヴェトナムのばあいは、信頼すべき人口統計としては1936年のものがあるものの、断片的であるため、その断片によって全体的な推測をせ

表1 ジャワ島の人口増加

年	人
1815	4,499,250
1845	9,374,477
1860	12,514,262
1870	16,233,100
1880	19,540,813
1885	21,190,626
1890	23,609,312
1895	25,370,545
1900	28,396,121
1905	29,978,558
1920	34,428,711
1930	40,891,093

出所：太平洋問題調査会（東亜研究所訳）『太平洋地域の人口と土地利用』東亜研究所、1943、p. 148. 原著は、International Secretariat, the Institute of Pacific Relations, *An Economic Survey of the Pacific Area Part 1, Population and Land Utilization*, 1941.

表2 ヴェトナムの人口（1936年）

地 域	人
トンキン	8,700,000
アンナン	5,656,000
コーチシナ	4,616,000

出所：台湾総督府外事部編『南洋年鑑 第4回版 上』台湾総督府外事部、1943、p. 39.

注：トンキン、アンナン、コーチシナという呼称は、現在では用いられていない古い呼称であり、ヴェトナムの北部・中部・南部に相当する。

ざるをえないのだが、表2にみられるように、北部に人口が集中している様子はよみとれる。

北部への人口集中といっても、この数値でみるかぎり、人口周密といえるかどうか疑問が出てくるかもしれないが、ヴェトナムにおける居住状況を勘案すれば、すなわち「かれらが村をつくるには一つの鉄則があった。それは、25

メートル以上のところに住まないことである」²⁾ という習慣から考えて、居住可能な地域に人口が奔めいていたことが想像できよう。この人口統計よりはるか以前に、「開発を目的とする意味から、荒地の譲渡を願う者にはだれでもその自由を与え、1481年には屯田村が創設され、それにもなって築堤作業もますます盛んとなった。かくて15世紀をすぎると、トンキンデルタでは利用すべき土地はすべて占領されてしまった」³⁾ という。遅くとも15世紀末にはほぼ人口は極限状態を迎えたということになる。たしかに明の支配を受けていた15世紀初頭のころ（1414-1427）のヴェトナムも、食糧事情は逼迫していたようである。山本達郎は『安南史研究』⁴⁾ において、「安南各地に於て明人が主として城砦を守り、土軍が主として屯田に従事する様に定められた事実がわかる。併しシナ内地からの輸送と屯田とが並行して行はれたにも拘らず、（中略）糧食の十分な補給は困難となり勝ちであつた」⁵⁾ とし、ヴェトナム北部が自給繰りぎりぎりであったことをうかがわせる。

ヴェトナムにおける耕地利用の状況はきわめて窮屈であった。そうした窮屈さのなかで土地はどのように継承されていき、所有形態にどのような変化が惹起されたのであろうか。そうした点に焦点をあてていこうとする試みが本稿である。

ヴェトナムの公田制

ヴェトナムにおける土地所有制度を考えるばあい、公田制度を抜きにすることはできない。公田というと国家所有の土地・官田のように聞こえるが、ヴェトナムにおける公田はそれよりむしろ村落共有田として理解しなければならない。公田制度はおおよそ15世紀ごろを起源とし、その後長い間ヴェトナム中・北部の各地でみられるようになった。しかし、阮朝 *Nha Nguyen* 期のフランスの介入とその後のフランス植民地政権の支配確立によって、貨幣経済の

導入がはかられ、この制度が急速に消失するかにみえたのだが、ヴェトナム独立後の土地改革にさいして、公田制がきわめて重要な役割を担っていた⁶⁾ ところから推察しても、そう急速に消滅しはしなかったようである。したがって、この制度のもつ意味を探ることは、ヴェトナム理解のうえではすこぶる重要なことと思える。

ヴェトナムにおける公田制の研究は、桜井由躬雄⁷⁾ によって一気に深化した。しかし、ヴェトナム公田制について最初にまとめたかたちで言及したのは、ヴ・ヴァン・イエン Vu Van Hiên であった。彼が1940年に著した *La Propriété Communale au Tonkin ; Contribution à l'étude historique, juridique, et économique des Công-diên et Công-thô en pays d'annam*⁸⁾ において、トンキンの村落にみられる公田 công-diên もしくは公土 công-thô についての分析が試みられたのである。そこでは、中国の井田制やジャワのサワー、ロシアのミールなどとの比較もなされ、興味深い議論が展開されている。公田制については、『公田』なる名称は蓋し周禮から得たものであらう。然し歴史は屢々言葉なるものが其の言葉に起源を與へた制度とは極めて異なる内容を有する諸制度を指示する為に使用される事を示してゐる。逐語的に云つて公田なる語は『公有稻田』rizières publiques を意味するものであり、特定の村有地 terres communales を指示する為に使用される以前に於いて、それはより廣範圍な意味を持ち、国家に所属する凡ての土地を總稱してゐたものと見る可きである。単に『公有地』terrains publics を意味するに過ぎない公土の名稱に就いても又同様の事が云へるのである⁹⁾ とされ、借用語としての「公田」が、ヴェトナムに定着するさい、意味内容に大きな変化があったことを示唆している。また、黎朝 Nha Le 期の法典に準拠し、村落共有田の割替について、「凡ての登録民は自己の属する共同体に課せられる負担を開始する年齢たる十五歳に達する

と、此の割換に参加する。然し共同体は村落名簿への登録年代の古き順に従ひ、又其の学識程度や、多数の範疇に分れる職務に従つて分類される為め、登録民の凡てが同一の権利を有してゐたのではなかつた。何故ならば、土地の分配は受益者の社会的階層を考慮して行はれるからである¹⁰⁾ として、公田の割替について論及している。さらに、ヴェトナム公田の分配方式には、「今尚ほタイ人の間に行はれてゐる慣習に類似してゐる極めて奮い慣習の遺制を認む可きであらう。而してそれは共有地の定期的割換に於いて郷職達に特別の利益を認める事である¹¹⁾ とし、郷職層 notables = huong chuc に特別の配慮がなされていることは注目に値する。こうした郷職層への特別な配慮は、ヴェトナム社会のもつ「強固な階層的組織に基因してゐる事は確かである¹²⁾ と断言する。「安南村落は其の成員間に構築された此の階層制を除外しては説明し得ない。此の階層制を維持せんが為め、各階層に応じて土地の分前が決定され、其の土地の用益権はそれを占有する者に帰属してゐる。各人は其の社会的地位を保持し得るのである。そして君主より与へられる他の凡ての恩恵と同様、国家の所有に属する村落共有地の享有は斯くて総ての人々に均等に分配されるのである¹³⁾ というふうに、公田の分配をめぐる村落自治に着目する。さらにつづけて、「各人は実際に自己に値する所のものを受ける。最も高い地位が最も賤しい人々に開放されてゐる安南社会に於いては、最上位の階層に到達した人々は単に其の個人的価値に相当するものを所有してゐるのであると考へられてゐるからである¹⁴⁾ と、ヴェトナム社会を考えるさいに考慮しなければならない重要な観点を明示した。

1940年のヴ・ヴァン・イエンによる公田制の研究がもっともまとまった研究でありつづけているということは、公田制に関する史料が希少であることもさることながら、その希少史料がフランス極東学院に収集されており、それらが

インドシナ地域からフランスが撤退するさい、持ち出されてしまったことが最大の要因であろう。それが実証研究の衰微につながっていったことは間違いない。またヴェトナム研究者による公田制の研究が、ヴェトナムが社会主義体制をとっていることを勘案したとしても、おしなべてイデオロギー的な色彩を帯びた議論に終始している¹⁵⁾ ことの大きな要因でもあろう。文脈は異なるが、桜井の表現を借りれば、「ベトナムの歴史研究をひどく退屈なものにしている」¹⁶⁾ のである。

ヴ・ヴァン・イエンの研究が出る前に、ヴェトナム北部における公田制の多様性について報告したのはフランスの地理学者 P. グルーであった。グルーは、Les terres communales (cong dien) occupent une part importante du Delta¹⁷⁾ と述べ、公田に terres communales という訳語をあてると同時に、公田制のもつ重要性に着目したのである。terres communales は、村落共有田のことであり、この語が以後公田 cong dien の実態を表す語として定着していった。またグルーは、公田の面積がおよそ 2,300km² にのぼる¹⁸⁾ とし、これはトンキンデルタ耕地面積の 5 分の 1、トンキンデルタ総面積の 7 分の 1 に相当する¹⁹⁾ としている。さらにグルーは、公田とは異なる村落所有の稲田があり、それらは 8 種類からなるとしている²⁰⁾。

than tu dien (神祀田) phat tu dien (仏寺田) hau dien (候田) tu van dien (斯文田) vo pha dien (武譜田) qua phu dien (寡婦田) co nhi dien (孤児田) hang tong (行總) がそれである。それぞれ目的に応じて名称に違いがあるものの、村落祭事のための稲田と相互扶助的要素をもった稲田とに分けることができる。村落祭事のための稲田は、than tu dien (神祀田) phat tu dien (仏寺田) hau dien (候田) tu van dien (斯文田) vo pha dien (武譜田) hang tong (行總) であり、相互扶助的意味合いをもったものとしては、qua phu dien (寡婦

田) co nhi dien (孤児田) が挙げられよう。

桜井は、こうした議論を受けて、「黎朝以降 18 世紀初めまでのベトナム田制においては、公田のみが課税され、私田とよばれる田種は非課税であった」²¹⁾ とし、私田は「耕作し納税されるかぎりにおいては世襲的個人占有を認められた売買可能の田である」²²⁾ とする。この私田にかんする記述には矛盾がみられるものの、公田と私田の並存という状況がヴェトナム村落には一般的みられたことは確認できる。しかし桜井は、「私田占有の量によって公田受給が減額され、かつ土地の耕作を放棄すればその占有権も失われる」²³⁾ という点に着目して、近代的土地所有権の範疇で私田を考えることはできないとしている。したがってヴェトナム公田制は黎朝期均田例によって始まったと推定する。すなわち、明軍撃退の後、「莫大な帰農兵に対する田土の確保のために田の均給が求められた」²⁴⁾ と推定するのである。また早急な国内政治体制の確立のためには、官吏に対する給田も必要となる。こうしたことから、順天均田例 (1429) は、「兵士及び官吏への給田 = 職禄田の支給としての性格が強い」²⁵⁾ とはいえ、「一般人民への給田も同時に施行された」²⁶⁾ としている。総じて桜井は、順天均田例の性格を「田土の国有地化を強権的にすすめ、流民化せんとする無田の民・失業兵士に強制耕作させて地税を確保する一方、一般官吏には職禄田として支給して俸給体系を補完し、さらにこれに不可譲渡性・割替耕作制を賦与して永続的な個人占有化を防ぎ、またその一部を高官に世業田として賜与したものの」²⁷⁾ と結論づけている。

公田制における割替制

こうして個人占有化をのがれた稲田は、以後その性質を変容させ、官田としての「公田」から村落共有田としての公田へと変質していくのである。そのさい桜井によって着目されたのが割替制である。ヴェトナム公田制における割替制理解のために、桜井はさまざまな割替制との

比較を試みる。ヴ・ヴァン・イェンも触れている山地タイ族の割替制共有田、沖縄本島の割替制、ジャワの割替制、鹿児島門割制、宇和島のくじもち制度、福井藩の割替制、越後平野の割替制、信州の割替制と比較するのである。これら割替制のうち中世的領主制下の割替制は、山地タイ族の割替制共有田、沖縄本島の割替制、ジャワの割替制、鹿児島門割制であり、それらは「共同体的土地占有は、各家族による個別的世襲占有を経由して、個人占有に移行するのが一般的である」²⁸⁾が、「いまだ商品経済が未成熟な段階に外部または内部に経済外的強制力をもった階層が成立したとき、共同体的割替規制があらたな権力によって、固定化または発展強化される」²⁹⁾事例であるという。こうした領主制下の割替制には以下のような共通点があるが、これらはヴェトナムの公田制とは完全には一致しない³⁰⁾という。

狭い扇状地・河谷平野を中心とした自給的色彩の強い主穀農業

全体的には畑作が優位で、しかも周辺の山地には焼畑耕作が最近世まで存続

領主権力が発生し、村落を納税団体として再編成

これに対して、宇和島のくじもち制度、福井藩の割替制、越後平野の割替制、信州の割替制は、近世的性格を有している。これらはおおむね「職禄田を喪失し、割替持分には均分原則がみられず、持分権の売買が一般的で、村落成立自身が近世初期の開拓によるところが多い」³¹⁾という特色をもち、「デルタまたは広大な扇状地空間において、水田が卓越した地域に広範な割替制村落が分布している地域」³²⁾であるとする。

では、東・東南アジア地域の水田割替制のなかにおけるヴェトナム割替制村落共有田（公田）はどのように位置づけられるのであろうか。東・東南アジア地域の水田割替制は多種多様であるが、社会の発展段階に応じておおむね

原生的な割替制、 領主的な割替制、 近世

的な割替制に類型化することができる³³⁾。それらの特徴を桜井は以下のように分類する³⁴⁾。

原生的な割替制はある一定の集団形成をなした自給的な山地焼畑社会での開墾などにおける共同労働制に由来し、領域の固定化と人口の集住によって発展する

領主制的な割替はもっとも広い分布と多様な形態をもっている。一般には盆地河谷などに稲作・畑作などが共存している農業条件下において領主制が発生し、既存の村落を納税賦役団体として再編成する過程で生じる。多くは原生的な割替制との連続関係をもつと推定されているが、資料的にはまったく不明である。この割替制は領主制の強化とともに非割替制の領主直営田・職禄田を析出させ、かつ割替田そのものを個別的農民保有田に移行させる傾向をもつ。

近世的割替は、日本のデルタ低湿地、鉄砲水地帯の扇状地など、開発が新しく、かつ水害のために農業生産が著しく不安定な地域に近世初期以降発展した慣行である。この慣行の始源は中世的割替と同様に権力による納税団体としての再編成にかかわるが、耕作強制としての側面は薄れ、封建小農層の維持に重点が移る。しかも近世中期以降においてはしだいに村落共同体の主體的な慣行として定着した。しかし、中世的な割替と相違して平等割原則は薄れ、近世村落内部の階層分化を反映して、高割制や持分権の分割・集中を認める軒前制が一般的になっている。

こうした明確な分類基準に基づいて、桜井はフランス支配が確立したころのヴェトナム公田制が近世日本の越後平野の割替制と類似しているものの、以下の3点において異なるという³⁵⁾。

ベトナムの共有田においては、日本の近世的割替には喪失されている職禄田が存在する

村落内階層分化が進んでいるにもかかわ

らず、均等割の原則は崩れていない。

商品経済の進捗にもかかわらず、多くの村落で持分の売買は認められず、かわりに村落内の富農へ賃貸する制度が発達し、村落の占有権が個人の持分権よりもはるかに優越している。

したがって、ヴェトナム公田制の特徴と意味は、「納税団体としての村落の意味が、はるかに強かったことを意味する。またこれは日本近世村落を構成する封建小農の経済的自立性が19世紀ベトナム社会には発見できないこと、すなわち商品生産に裏打ちされた農民的土地所有がベトナム社会においては未成熟であったことを意味する」³⁶⁾と総括できよう。そしてヴェトナム公田制は、均等割・職禄田の存在・割替周期などの点で、土田のすべてが共有地であった明治30年代までの沖縄の割地制と共通点が多いにもかかわらず、ヴェトナムでは私田と公田が混在し「村落の主体的な選択 私的な協約がはたらく余地は比較的少なく、上部権力による統一的な割替強制の影響を考えなければならない」³⁷⁾点で相違する。

上部権力の統一的な強制力という視点からは、19世紀段階からのジャワにおけるサワードサとの比較が興味深い。ジャワにおけるサワードサとヴェトナム公田制の共通点は、村落共有田存在比率の多様性、分布の広域性、広範な職禄田の存在、夫役負担者への均等割の原則的遵守、村落の自立的管理などである³⁸⁾が、ジャワにおけるサワードサが広域的に確立したのは、植民地権力の思惑があったことであつた。オランダ植民地権力は、ジャワにおける租税夫役負担人口の恒常的確保という命題をサワードサにおいて実現しようとしたのである。ヴェトナムにおいても、「割替形式の統一性と分布の広域性をもたらしたものとして、ある歴史時代の上に19世紀ジャワにおけるオランダ植民地権力に相当する紅河デルタ中央権力の直接的・間接的な村落内干渉を考える必要があるだろう。ベトナムにおいてそれが前植民地期

の国家権力に求められることはいうまでもない」³⁹⁾のである。面白いことに、「18世紀以降の沖縄においても、また19世紀後半のジャワにおいても、上部権力はこの割替制を否定し、個別占有の道を強制しようとするにもかかわらず、村落の側では土地の共同占有制を執拗に維持しつづけた点にある。これは近世の日本的割替においては、未成熟な農民的土地所有が共同体的な土地占有という形をとって、個別農民の生産を権力に対抗して防衛しようとするものとして評価される」⁴⁰⁾のであるが、「ベトナムの前植民地権力は、国家的土地所有としての共同占有の原則を変えようとはしない。したがって現実としての村落の主体性が発展するにともなう、国家的な割替制規定は微妙に変化していく」⁴¹⁾ことになる。また、「19世紀前半の沖縄においては地方役人層の持分権の増大、家内倒れ・与倒れ農民層の発生、19世紀後半のジャワにおいては職禄田の拡大・中核農民層と非賦役負担者との分離を通じて、村落は全生産者の共同体から貢租負担者の村落に変質していく。ベトナムにおいてはこの過程は、17世紀・18世紀を通じての人口の増大と耕地の限定、18世紀にはいつてからの饑饉の続発により、戸籍登録農民と非登録農民、村落民と流民間の分離として現れる」ことから、ヴェトナム公田制の究明は、「単にベトナム史の発展段階問題にとどまるものではなく、『アジア的』割替制社会の歴史を考えるうえにもっとも重要な位置を占める」⁴²⁾といえるのである。

ヴェトナムの村落

ヴェトナムの村落は一般に社 xa とよばれ、公田社と私田社とに分けることができる。公田社は社内の田はほとんど公田からなり、私田社は私田が卓越し若干の公田が混じっている社のことである。公田社の成立を桜井は、「かつての田庄・国庫田・斫刀田、また荒廃田を国有田化し、これを農民に均給耕作させるために公田社が生じたと理解すべきであろう。この意味で

は公田社はその当初から納税組織として人為的に設定された可能性がきわめて強い⁴³⁾とする。公田とのからみでヴェトナムの社は形態を整えていった点については、注意を払わねばなるまい。

さて、ヴ・ヴァン・イエンは、中国において紀元前4世紀にはすでに崩壊していた井田制の残滓が、ヴェトナムで純粋にその意味内容を保持しつづけたということはあるまいとし、中国での土地所有制度が、私有地を中心とした制度に転換したことを述べ、さらに、私有地の集合体としての村落もそのありようは中国とヴェトナムではまったく異なっていると結論づける⁴⁴⁾。中国における村落は、A. H. スミス⁴⁵⁾のこたばを引用しつつ、「支那に於いては村落は一定数の家族で構成され、家族の長は家族成員と公権力との間の必要な媒介者となつてゐる。血縁の紐帯は支那では極めて重要性を持ち、家族 famille 氏族 clan 村落 village と云ふ言葉は事實上屢々同意語であり、そして『多数の村落は同一の姓を有し、同一の祖先を有する人々のみで構成されてゐる』⁴⁶⁾」のを特徴としてゐるとヴ・ヴァン・イエンはいう。これに対して、ヴェトナムの村落は地縁的紐帯の方が優越している。つまり、「支那村落の内部に於ける斯くの如き家族の優越せる役割は安南の村落に於いては全く存在してゐない。即ち安南の村落は嘗て一度も、行政組織の基礎的単位とされた事がなかつた。安南の歴史の或る時代に於いては、村落の役人が中央政府に依り任命されてゐた時に、国家が住民との交渉に直接的に干渉し、如何なる媒介者をも介在させなかつた。實際、何れの時代に於いても農民にとつては、自己の周囲に屢々起こる利益や上席権の確執に際して、若しかの場合に彼を支援する事の出来る数多くの家長を持つ事が有益であるが、同姓人の集合體たる戸 ho は法律上、行政との關聯に於いて何等の役割をも演じてゐない。安南国に於いては廊 lang 或は社^{シャ} xa 村落 は公的に^{ホウ}は戸の集合體として定義付けられない。村落は血縁的關

係よりも寧ろより地縁的關係に依つて結ばれてゐる⁴⁷⁾」のである。

社という村落名称は「明の支配から黎朝初期にかけての時期に、これまでの郷・洞・寨などの村落を改変して成立した⁴⁸⁾」のであり、「社は地理的には黎朝の直接支配地の村落に対してのみ用いられた名称である⁴⁹⁾」が、その増減はみられるものの、黎朝期を通じてほぼ一定数で推移している。ヴェトナム村落を代表する社という名称は「黎朝初期から洪徳期にかけてのある一定の時期に創られた歴史的概念であつた⁵⁰⁾」ため、新しい時代、たとえば明命 Minh Mang 帝の時代(1820-1839)には、開拓によって生まれた新村には社という名称は用いられていない。そこでは、「里 ly・邑 ap・寨 trai・甲 giap の名称を与えられている⁵¹⁾」のである。したがって、フランス植民地政権によるメコンデルタの開発によって生まれた村には、社という呼称が採られることはなかつた。

おわりに

ヴェトナム村落を特徴づけていた公田制もフランスの介入によって変質してくる。フランスはヴェトナム南部に大きな旨味をみだし、メコンデルタの開拓を推進する。メコンデルタ開拓によって生まれた新しい村は、かつての公田制のようなシステムをもつことなく近代的な資本主義生産の経済枠組みのなかに組み入れられていき、世界3大米輸出地域としてのヴェトナムを造りだすのである。世界経済とのリンクはフランスを通じて米穀によって達成され、ヴェトナムはいやおうなく世界経済の景気変動の波にさらされていくことになる。もちろん、ヴェトナム北部は石炭によって世界経済とリンクしていたのではあるが、経済規模としての重要度は圧倒的に米穀にあった。そのため米穀生産の状況がヴェトナムの存立を左右することとなっていくのである⁵²⁾。そうしたなかで、ヴェトナム北部は、かつての社を基盤としてささやかな自立性を保持しつづけていた。それゆえ、歴史

的社会階層としての郷職層 notables = huong chuc や文紳層 van than の存在が、ヴェトナム社会変革のカギを握っていくことになるのである。

昨今では、外国資本によるヴェトナムでの活躍には著しいものがある。とりわけホテル建設等でのフランス資本および台湾資本の進出が著しい。日本資本もその例外ではない。外国資本による地域開発もしくは土地取得のさいには、ヴェトナムにおける歴史的土所有概念に注意を払う必要があろう。

以上ヴェトナム公田制について筆者なりにまとめたが、理解できない点や不明なままの点が多い。しかし積年のおもいはおおむね払拭できた。思えば桜井由躬雄氏との邂逅は30年以上も前のことになる。慶應義塾外国語学校 ベトナム語科で桜井氏と机を並べてヴェトナム語を学び始めたとき、氏の語ってくれるヴェトナム公田制は新鮮であった。その桜井氏によって東京大学の永積昭先生の大学院博士課程のゼミに強制連行されたのが、ヴェトナムとの本格的なかかわりの始まりであった。そこには若い白石昌也氏（早稲田大学大学院教授）や今年で東京大学副学長を辞す古田元夫氏や倉沢愛子氏（慶應義塾大学教授）や高田洋子氏（敬愛大学教授）という錚々たる人物がいて、喧々譁々の議論を展開していた。その桜井氏も今年で東京大学を定年退官される。この稿がヴェトナム研究の入り口に立たせてくれた桜井氏の学恩に報いるものとなっていればいいのだが。

注

- 1) 太平洋問題調査会（東亜研究所訳）『太平洋地域の人口と土地利用』東亜研究所（International Secretariat, the Institute of Pacific Relations, *An Economic Survey of the Pacific Area Part 1, Population and Land Utilization*, 1941.）, 1943, p. 149.
- 2) 菊池一雅『インドシナの社会構造』早稲田大学出版部, 1975, p. 16.
- 3) 菊池一雅『ベトナムの農民 増補版』古今書院, 1973, p. 52.
- 4) 山本達郎『安南史研究』山川出版社, 1950.
- 5) 『安南史研究』p. 592.
- 6) 桜井由躬雄『ベトナム村落の形成 村落共有田 = コンディエン制の史的展開』創文社, 1987, p. 89. では、「ベトナム民主共和国の土地改革において村落共有田 = 公田制がはたした役割はきわめておおきい。（中略）地主層の抵抗をうけることなく、この大量の土地所有権移動を可能にしたのは北ベトナムにおける村落共有地の存在である。（中略）北部35村落の土地移動調査によれば、1945年8月から1953年4月の間に30万2,738ヘクタールの土地が移動したとされるが、このうち18万4,871ヘクタール、61%がこの共有地関係の再分配によるものであった」と述べられている。
- 7) 前掲『ベトナム村落の形成 村落共有田 = コンディエン制の史的展開』創文社, 1987. は、ヴェトナム公田制研究における記念碑的労作である。
- 8) Vu Van Hiên, *La Propriété Communale au Tonkin ; Contribution à l'étude historique, juridique, et économique des Công-diên et Công-thô en pays d'annam*, 1940, ヴ・ヴァン・イエ（中込武雄・大橋宣二訳『仏印に於ける公田制度の研究 村落共有地の法律的・社会的・経済的研究』栗田書店, 1944.
- 9) 『仏印に於ける公田制度の研究』p. 4.
- 10) 『仏印に於ける公田制度の研究』p. 41.
- 11) 『仏印に於ける公田制度の研究』p. 41.
- 12) 『仏印に於ける公田制度の研究』p. 41.
- 13) 『仏印に於ける公田制度の研究』pp. 41-42.
- 14) 『仏印に於ける公田制度の研究』p. 42.
- 15) 『ベトナム村落の形成』pp. 25-32.
- 16) 『ベトナム村落の形成』p. 32.
- 17) Pierre Gourou, *Les paysans du Delta Tonkinois ; étude de géographie humaine*, Paris Mouton & co Lahaye McMillan, 1936, (repr. 1965) p. 364.
- 18) *Les paysans du Delta Tonkinois*, p. 364.
- 19) *Les paysans du Delta Tonkinois*, p. 365.
- 20) *Les paysans du Delta Tonkinois*, p. 371.
- 21) 『ベトナム村落の形成』p. 78.
- 22) 『ベトナム村落の形成』p. 78.
- 23) 『ベトナム村落の形成』p. 249.
- 24) 『ベトナム村落の形成』p. 81.
- 25) 『ベトナム村落の形成』p. 81.

- 26) 『ベトナム村落の形成』 p. 81 .
- 27) 『ベトナム村落の形成』 p. 86 .
- 28) 『ベトナム村落の形成』 p. 44 .
- 29) 『ベトナム村落の形成』 p. 44 .
- 30) 『ベトナム村落の形成』 pp. 58-59 .
- 31) 『ベトナム村落の形成』 p. 59 .
- 32) 『ベトナム村落の形成』 p. 59 .
- 33) 『ベトナム村落の形成』 p. 67 .
- 34) 『ベトナム村落の形成』 pp. 67-68 .
- 35) 『ベトナム村落の形成』 p. 69 .
- 36) 『ベトナム村落の形成』 p. 69 .
- 37) 『ベトナム村落の形成』 p. 69 .
- 38) 『ベトナム村落の形成』 p. 70 .
- 39) 『ベトナム村落の形成』 p. 70 .
- 40) 『ベトナム村落の形成』 p. 70 .
- 41) 『ベトナム村落の形成』 pp. 70-71 .
- 42) 『ベトナム村落の形成』 p. 71. ここで、桜井が「アジア的」として「 」を付しているのは、その背景に周知の「アジア的生産様式」論を想定しているからにほかならない。
- 43) 『ベトナム村落の形成』 p. 99 .
- 44) 『仏印に於ける公田制度の研究』 pp. 5-6 .
- 45) A. H. Smith, *Mœurs curieuses des chinois*, p. 210.
- 46) 『仏印に於ける公田制度の研究』 p. 6 .
- 47) 『仏印に於ける公田制度の研究』 pp. 6-7 .
- 48) 『ベトナム村落の形成』 p. 176 .
- 49) 『ベトナム村落の形成』 p. 176 .
- 50) 『ベトナム村落の形成』 p. 175 .
- 51) 『ベトナム村落の形成』 p. 175 .
- 52) 第2次世界大戦期のヴェトナムの米穀問題は、あちこちに書き散らされた筆者の論文によって触れられている。なお、それらは博士（経済学）学位論文『第二次大戦期日本のインドシナ米確保に関する研究 Indochina's Role under Japan's Parasitic Colonialism』としてまとめられている。

参考文献

1. 太平洋問題調査会（東亜研究所）『太平洋地域の人口と土地利用』東亜研究所（International Secretariat, the Institute of Pacific Relations, *An Economic Survey of the Pacific Area Part 1, Population and Land Utilization*, 1941. ），1943.
2. 台湾総督府外事部編『南洋年鑑 第4回版 上』台湾総督府外事部，1943 .
3. 菊池一雅『インドシナの社会構造』早稲田大学出版部，1975 .
4. 菊池一雅『ベトナムの農民 増補版』古今書院，1973 .
5. 山本達郎『安南史研究』山川出版社，1950 .
6. 桜井由躬雄『ベトナム村落の形成 村落共有田 = コンディエン制の史的展開』創文社，1987 .
7. Vu Van Hiên, *La Propriété Communale au Tonkin ; Contribution à l'étude historique, juridique, et économique des Công - điền et Công - thổ en pays d'annam*, 1940, ヴ・ヴァン・イエン（中込武雄・大橋宣二訳『仏印に於ける公田制度の研究 村落共有地の法律的・社会的・経済的研究』栗田書店，1944 .
8. Pierre Gourou, *Les paysans du Delta Tonkinois ; étude de géographie humaine*, Paris Mouton & co Lahaye McMLxv, 1936, (repr. 1965)
9. Yves Henry, *Economie agricole de l'Indochine*, Gouvernement Général de l'Indochine, Inspection Général de l'Agriculture, de l'Elevage et des Forêts, Hanoi, 1932. 東亜研究所第四部訳『仏領印度支那の農業経済（上・中・下）』東亜研究所，1941 .
10. Jean Cheneaux, *Contribution a l'histoire de la nation vietnamienne*, Editions sociales, 1954. J・シェノー（斎藤玄・立花誠逸訳）『ベトナム民族形成史』理論社，1970 .
11. Charles Robequain, *L'évolution économique de l'Indochine française*, Paris, 1939. C・ローブカン（松岡孝児訳）『仏印経済発展論』有斐閣，1955 .
12. 田淵幸親『第二次大戦期日本のインドシナ米確保に関する研究 Indochina's Role under Japan's Parasitic Colonialism』博士（経済学）学位論文，2003 .